

残照

岸まで迫り並ぶ森に囲まれた湖に
今、木の幹の格子の間より琥珀色の光が射し
全ては己の長い影と親しく笑い合う
この時こそ太陽と差し向かうことはでき
光を手やすく取って飲み干すことはできる

木々は全てオレンジ色の背景の中に
墨の如く、影絵の如く、黒い切絵の如く並び
湖面はただ静かにゆらゆらと揺れて

向こう岸より金箔の浮き橋を掛け渡して眩^{まばゆ}く
古木にもたれかかる休息の人の目を細めさせる

浮き橋の上に、うなだれる白鳥のシルエット
夕日の如き酒を注ぐ黄金の入れ物に似る
酒の中に沐浴して旅人はうっとり酔い

白鳥は羽ばたいて金の滴^{しずく}を散らす

眠りが別れの哀しみを溶かし去る残照です

(1982.5.23)